

平成28年度第3回
広島県総合教育会議会議録

平成29年2月8日

平成28年度第3回 広島県総合教育会議会議録

平成29年2月8日（水） 16：00開会

17：59閉会

1 出席者の職及び氏名

知事	湯崎英彦
教育長	下崎邦明
教育委員会委員	佐藤卓巳
教育委員会委員	細川喜一郎
教育委員会委員	中村一朗
教育委員会委員	志々田まなみ
教育委員会委員	近藤いずみ

(外部有識者)

慶應義塾大学	環境情報学部	教授	今井むつみ
広島大学大学院	教育学研究科	教授	七木田敦

2 協議事項

- (1) 乳幼児期の教育・保育の充実について
- (2) 次回のテーマについて
- (3) その他

経営企画監： それでは、ただ今から、「平成28年度第3回広島県総合教育会議」を開催いたします。はじめに、湯崎知事より御挨拶を申し上げます。

湯崎知事： それでは失礼いたします。平成28年度第3回広島県総合教育会議の開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。皆様方におかれましては、大変御多用のところ御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

また、本日は2名の有識者の方に御出席いただいております。両先生におかれましては、公私とも大変御多用のところ、御出席を賜りましたことに対して、改めて御礼を申し上げます。

さて、本県では今年度、子供が育つ環境にかかわらず、県内全ての乳幼児に、育みたい力の育成に向けた教育・保育が行われ、小学校以降の教育の基礎が培われるよう、新たな計画の策定に取り組んでいるところでございます。案段階のものが本日の配付資料になってございますけれども、間もなく、『遊び 学び 育つひろしまっ子！』推進プラン」という名称で、策定される運びとなっております。

今後はこのプランの目指す姿の実現に向けまして、乳幼児期の子供に係る家庭、地域、幼稚園・保育所・認定こども園など、様々な主体が、それぞれの役割を果たしながら、「オール広島県」で取組を進めていくことが重要であると考えております。

そのため、本日の会議では、有識者のお二人に専門的な見地からの御意見を頂きました上で、知事部局と教育委員会が連携をいたしまして、いかに効果的にこのプランの施策を進めていくかについて、御協議いただきたいと思いますと考えております。

それでは、皆様におかれましては、忌憚のない率直な御意見を賜りますことをお願い申し上げます。御挨拶とさせていただきます。どうぞ、よろしく願いいたします。

経営企画監： 続きまして、本日お招きいたしております有識者の方々を御紹介させていただきます。慶應義塾大学環境情報学部 教授 今井 むつみ様でございます。

今井教授： よろしく願いいたします。

経営企画監： 広島大学大学院教育学研究科 教授 七木田 敦様でございます。

七木田教授： よろしく願いします。

経営企画監： 続きまして、本日の日程について御説明いたします。お配りしております次第にございますように、本日はこの後、七木田先生、今井先生から、意見発表をしていただきます。そして、お二人にも御参加いただきまして、「乳幼児期の教育・保育の充実について」をテーマに協議を行っていただきたいと思いますと考えておりますので、よろしく願いいたします。なお、本日の協議に関連する資料につきましては、参考資料といたしましてお手元に用意いたしております。適宜御参照いただければと思います。

それでは、ここからは湯崎知事に進行していただきたいと思いますので、よろしく願いします。

湯崎知事： それでは、よろしく願いいたします。早速ですが、本日御出席いただきましたお二人の先生方から、発表をお願いしたいと思います。

はじめに、広島大学大学院 七木田先生から御発表をお願いいたします。

七木田教授： 今日はこのような席にお招きいただきまして、ありがとうございます。ただ今、知事のお話にございましたように、広島県では『遊び 学び 育つひろしまっ子！』推進プラン」ということで、この推進プランの策定に、今日いらしていただいております今井先生と一緒に関わってきました。

今日は、このプランの実行のためにどうすればいいか、あるいは幼児教育の充実のために広島県はどうすればいいかということについて、テーマを絞ってお話しさせていただきます。よろしく願いいたします。

お手元の資料と、前のスクリーンを見ていただければと思います。

三つ、お話をさせていただきたいと思っております。お手元でございます推進プランの中で、可能性と課題について、お話をさせていただきたいと思っております。

二点目は、テーマを絞らせていただきまして、保育所あるいは幼稚園・認定こども園から小学校への接続というのは、非常に大きいテーマになるに違いないと考えております。そのためは是非、関係の方々は、そこに重点を置いたような施策を充実させていただきたいと思っております。

三点目は、広島県のみならず、日本全国で幼児教育あるいは保育の重要性、後の教育に及ぼす影響ということを広く研究されだしてきております。先進県では研修の充実のために、いろいろな施策を実施したり工夫をしたりしております。それを紹介させていただいて、広島県の何らかの有効な方向性を示せればいいかなと思っております。これ

ら三点について、お話しします。

幼稚園・保育所・認定こども園でございますが、幼児教育というと、皆さん、頭の中が点々となるに違いないと思います。なぜかという、皆さん、幼稚園・保育所を結構経験されていると思いますが、既に卒園してから随分時間がたって、どんなものがあったかというのが全然記憶にない。でも、少なくとも大学教育あるいは高校教育であれば、すぐに思いついたと言われるかもしれない。幼児教育になると何だっけという話になるかもしれません。

幼児教育・保育で、それ以降の小学校教育と一番違うのは何かというと、教科書がありません。ただ、教科書がないので何を教えてもいいかということそうではなくて、「幼稚園教育要領」というのを、幼稚園のために文部科学省が出しています。「保育所保育指針」というのを、厚生労働省が出しております。この度は認定こども園ができますので、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」を内閣府を中心として、そういう保育の中身については10年に1回ずつ改訂して出しています。この度、平成30年から新しいものが出るようになっております。

中身はこの5つの柱（環境、表現、人間関係、健康、言葉）で幼児教育・保育、実は幼稚園・保育所は入れ物が違いますが、目指す方向性はできた当初からずっと一緒でございます。日本の場合、この5つの領域で乳児・幼児を育てていこうということで一致しております。認定こども園もそうです。私は、この5つの領域は随分考え抜かれた教育の柱、保育の柱だなどと考えております。お隣の中国に行きますと、これに科学知識とか、韓国に行きますと、これに算数とか、いろいろ勉強の中身が入ってくるのですが、日本の場合には、「環境」、「表現」、「人間関係」、「健康」、「言葉」という広い領域の中で、子供たちを育てていくということになっております。

この解説書というのがあります。実は教育要領はただか20ページくらいの薄い冊子なのですが、解説書に至ってはこんなに厚いものになっております。中身を少し紹介させていただくと、具体的に何をしようか、何を教えたらいいかということは、文言がございません。中はこのように、私に言わせると非常に抽象的なお話が書かれていて、これが何を意味するかということ、どう教えるかは保育者の力量次第ということになって、保育の枠組みは決まっていますが、保育の質という、これも大きく小学校以降の教育と違ってきます。

5つの領域は、人間の乳幼児期の成長の上でとても重要だということで、戦後ずっと日本の幼児教育・保育は進んできております。0歳から5歳までというのは、保育で言えば0歳から3歳まで、その上の幼児教育は3歳、4歳、5歳の教育部門でございます。それを小学校につなげるということで、本県は日本一の教育県を目指すということでもありますから、小学校以前のところの教育をどうするかということに、私の言葉で非常に申し訳ないのですが、やっと気付いていただいたという気持ちがあって、これも是非、申し上げなければと思います。

先ほど、平成30年に新しく教育要領・保育指針が変わると申し上げました。10年に1回変わるのでありますが、実はここで大きな変更点がございます。10個、新教育要領・保育指針では新しい目玉としています。これが、これまでなかったことです。恐らく、幼稚園・保育所・認定こども園では、これをどうしようかとなる。なぜこれが出てきたかということ、先ほど御説明した5領域が非常に抽象的な内容で、5年間あるいは6年間をかけて卒園まで教えて、なおかつ小学校1年生になったときに、この子供たちはどういう子供になっているか、小学校1年生としてどういう子供になっているか見えないという話があったので、教育要領・保育指針では、新しい育つための姿、望ましい姿というのを10個つくと、新しい教育要領では書かれています。

スライドの赤い所を御覧ください。そこには「思考力の芽生え」、「数量・図形、文字等への関心・感覚」、あるいは「言葉による伝え合い」ということが赤です。赤い所は私が赤くしたのですが、これまでなかった。例えば学習、幼児教育では「学び」といいますが、そこへ新たに意味付けをして、ここがこれまで薄かったかもしれないので、これについて保育者は意識的になってもらいたいということで、こういうものが増えたと思います。

小学校に向けての指導理念は、先ほど申し上げました5領域あります。これは何十年変わらない日本の保育・教育力の流れですが、その後で平成30年までには、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿というのが、示されるわけでございます。この間のところが、多分、現場の保育者は何をしたいのか分からないという状況ではないかなと思

っています。5つの領域は、先ほど中身をお見せしたように抽象的で、何をしていたのか分からない、力量に任せられているというところで、大勢の方が非常に困られているのではないかなとも思います。

その中で、こちらの推進プランで提案された広島県の計画というのは5つございまして、「豊かに感じ気付き子」、あるいは「思いっきり体を動かして遊ぶ子」、「遊びを創り出す子」、「夢中でとことん遊ぶ子」、「心を通わせて遊ぶ子」というのは、恐らく、この最終的に卒園するまでの10の姿と、あるいは幼児教育・保育が持っている5つの柱の、間を取り持つ中身、コンテンツになるはずであろうと私は考えております。これは他県にない。他県でも多分、先ほど申し上げましたように、みんな困っているわけですが、他県にない方向性を示しているのではないかなとも思います。ただ、その場合、今後考えていただきたいのは、それぞれの項目の関連性を具体的にどう示すかということ、関係部局の所に明確に出していただくと、現場は混乱しないかなとも思います。

続いて、期待される効果です。保育の質は、恐らく向上するだろうと思います。具体的に皆さんのお手元に推進プランの冊子がございしますが、あるいは今申し上げたみたいに、保育の資料が具体化する。今まで、とても抽象的で保育者の力量に任せられたところがあるのですが、それが具体化して、指導においては役に立つに違いないと考えています。

もう一つは、先ほど赤で示しましたように、言葉あるいは認知的な能力のところも重点化されることによって、「学びに向かう力」と幼児教育・保育では言うておりますが、学習そのものではなくて「学びに向かう力」を育成できると言うている。これは、諸外国では「学びに向かう力」と言ったり、「学ぶための構え」と言ったり、「心理的な構え」と言ったりして、勉強そのものではないのです。新教育要領・保育指針の勉強そのものをやると、発達段階に合わないかもしれない。その準備をどうするかということの効果、期待できるかなとも思います。

課題といたしましては、先ほど申し上げましたように、10の姿と、あるいはこれまでの5領域との間を取り持つように、推進プランで示された5つのコンテンツとの整合性を、今後しっかり吟味して現場に提示していただきたいと思います。プランの内容とか、できれば指導モデルまで含めて、周知・徹底することが必要かなと考えております。

もう一つは、これはまた後で申し上げますが、それに伴って研修をいかに充実するかということを考えていただきたい。その場合には、幼稚園・保育所あるいは認定こども園のみならず、幼稚園・保育所から小学校への接続を考える場合には、小学校も一緒に入れたような研修の充実というのが、必要とされるのではないかなとも思います。もう一つ、実施運営のマネジメントを、どこまで、どのようにするかということも、明確にしていきたいと思います。

接続について申し上げます。小学校への接続は、先ほど申し上げましたように、「学びに向かう力」の育成のために、とても重要なことだと思います。御案内のように、昔は小1プロブレムと申し上げまして、小学校1年生のクラスがまとまらないということで、担任の先生がいながらも教頭先生が入り、時には校長先生も入りながら、小学校1年生の授業を何とかしようという話がありました。

一つ、例を申し上げます。1年生の授業というところで、ある町の例を申し上げます。

A町では、全町で新たに小学校1年生になるのは、平成25年で290人おりました。平成26年で276人で、270人くらいのところまで推移しています。その年ごとに、小学校に入ってから何か課題がありそうか、あるかもしれないというお子さん方がピックアップされております。それが、平成25年で67人、平成26年で72人、大体20%超くらいのお子さんが、ひょっとしたら小学校に行ったら課題があるかもしれないということで、事前に要経過観察児童ということで挙がっております。

これは非常に興味深いのですが、例えば平成25年でいくと、幼稚園・保育所から67人、290人のうち67人が、小学校に入ってから駄目かもしれないということでマークがつかれました。そのうち、小学校入学後15人は課題がなくなります。1年たつと52人残るのですが、そのうち13人も課題がなくなる。課題がなくなることについては、様々な生活環境の変化とか家庭環境の要因とか、いろいろな要因があるのですが、小学校にうまく適応できていくお子さん方が、このくらいいるのです。

問題は、幼稚園・保育所・認定こども園でチェックできなかった子供が、平成25年の場合で新たに13人出てきます。それは、言い方は悪いかもしれませんが、新規の課題がある児童が、1年生の終わる段階で、これは幼稚園・保育所・認定こども園で誰も、課

題がありそうだ、小学校へ行ってから勉強が大変そうだと思うれないままというのが、13人。これは、実は平成25年だけではなくて、A町におかれましては、ずっと毎年これをやられていて、その都度、幼児期から小学校に、どういう子供がどのように変化をしたかというのをやられています。平成25年で新たに13人が出ている。

この13人の内訳を調べておりまして、13人中、平成25年で見ると一番多いのが、学業不振です。だから、勉強がこんなについていけないとは、幼稚園・保育所・認定こども園でも分からなかったという話です。数的に多いのは、おとなしい子供、集団を乱さない子供。だから先生も気にしない、いいんじゃないかという子供が、その後小学校へ入るとちょっと大変。本当におとなしくなって、発言もなくて勉強が停滞するという。これは平成25年の例で御説明していますが、平成26年も大体同じような割合です。

A町の例を申し上げていますが、就学前、勉強がスタートする段階でもれてしまう子供というのがいます。これはA町だけではなくて、恐らく他の市町でも同じような割合でいるかもしれないです。それは、一番数字が多いのは、やはり学業不振だということです。もちろん幼児教育・保育では、勉強はどのくらい伸びるかというのをテストして、検査してやるということは、教育内容からしてふさわしくないのやっていないわけですが、多分それで、どうももれてしまう。そこに書いてありますが、学びの芽生えとか、認知的課題に対する意欲とか、それに対する頑張る力みたいなどは、どうも事前にチェックをするとか、先生のところで把握しておく必要があるのではないかなと思っています。

そのために、先ほど申し上げました、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿にある、正に思考力の芽生えとか、数量・図形・文字等への関心・感覚を、卒園する段階、保育所を修了する段階で、どのくらいあるかというのを見ていてください。それが、小学校に送るために、とても重要だということになっているのだと思います。

私は、よく幼稚園・保育所の先生たちに研修する際には、子供の学習を幼児期から始める必要は毛頭ない、それは発達段階に合った教育をすればいい。ただ、子供の学習に対する感度ですよね。どのくらい受け入れられるか、それは押さえておこうと。特に、この度の教育要領の改訂に伴って、そこが非常に重要なポイントになってくるので、この学習に対する感度を押さえるということも必要になるのかなという気はします。そのために、広島県の推進プランの5つの領域というの、ここの感度をどうやって押さえるかというところが、一つの視点になればいいかなと考えております。

幼稚園・保育所・認定こども園からは、事務的には保育要録といって、幼稚園・保育所ではこうですよという情報が、例えば1枚の紙で小学校へ送られます。これは、ある小学校で見せてもらって、3年間丸ごと、B4、1枚に書き込むという作業を、大変ではないのかな、書けないことも一杯あるだろうと思って見て、でも幼稚園・保育所の先生方は一生懸命これを今の時期に書いて、小学校1年生へ送り出している。

でも往々にして、これは小学校の校長室の金庫でございまして、金庫の中に入ったまま誰も見ない資料になっている。これは、実は笑えない状況でありまして、あれほど努力したのに誰も見ない。校長先生に、なぜ見ないのですかと言ったら、「それほど重要なので、やたら金庫を開けて先生に見せるわけにはいかない」と。でも、それを見ないと、教育課程とか、この子に合った教育は何かというのがつかめない場合もあるのに、そこに書いてありますように持ち出し禁止です。

それは別に、ある特定の小学校と幼稚園・保育所にあるだけではなくて、例えば、これは小学校のある市全部の校長先生に聞いたのですが、要録を見たことがあるかという、4割ぐらいしか見たことはない。6割ちょっとは、見たこともないと言うのです。見たことがあるというのは4割。金庫に入っているのは知っている。幼稚園・保育所から来て、情報は知っている。でも、それを見たことがないと、正直にお答えになっている校長先生がおられます。

ということで、これは同じように幼稚園・保育所からも、要録は送ったけれど多分小学校では読まれていないだろうと思うかと聞くと、半分以上は「そうだ」と答えます。幼稚園・保育所・認定こども園と小学校をつなぐ公的な書類は、保育要録ということになっていきますが、このように、どうも形骸化している状況にあって、その場合に幼稚園・保育所・認定こども園と小学校をどうつなぐかというのは、非常に大きい課題になっています。だから推進プランでも、是非そこはやっていただきたいと思っております。

諸外国の例を紹介いたします。例えば保育の先進国といわれているニュージーランドでは、こういう一人一人の保育の評価を、ドキュメンテーションという形でやられてい

ます。もちろん幼児教育ですから、テストがあって、そこで点数を付けるというわけにいかないで、子供が作成した絵を描いたものとか、子供が発した言葉みたいなのをきれいにパンフレット状にして、一人1部ずつ作って、いつでも持っていけて、お母さんもこれを見られて、あるいは小学校にもこれを渡す。小学校の先生がこれを見て、すぐ、子供の様子が分かるということをやっています。

隣のオーストラリアでも、似たようなことをやっています。これは正に楽しげで、いろいろな情報もあるのですが、オーストラリアでも、子供が遊び時間に拾った種というのも、ちゃんとサンプリングしているわけです。これも学びの結果です。これは一人一人、ファイルがずっとあって、これもニュージーランドと同じように、小学校へ接続する際に使うとおっしゃっていました。オーストラリアで面白いのは、保育というのは見えないというのが言われていますが、保育の見える化ということをやって、今日1日何をしたかというのを帰り際、お母さんが迎えに来るときに、1日あったことをビデオで流しているのです。こういうことも多分、保育はなかなか何をやっているか分からないので、見える化をしているということがあります。

スウェーデンでも、こういうファイルを作って、お子さん一人一人の状況を、ちゃんと写真を選んでいっているのです。これは、やはり子供の評価につながるのだと思います。

幼児教育には評価が合わないとか、評価するべきではないという非常に古い考えをいまだに持っておられる方が、中にはまだいます。私は、そうではなくて、活動は正に評価してあげる。ただ、そのための評価の仕方があって、こういう形の評価は世界中で行われております。イギリスに行きましても、ここでもドキュメンテーションをもって、子供の評価は、これについて記述的にしているとおっしゃってありました。

お隣の中国です。ここでも一人一人のファイルがあって、子供の評価をしている。中国は、幼稚園と保育所が一緒になったような所で子供が昼寝をしまして、そこで先生たちが集まって話し合いをしておりました。子供の評価を付けているのですが、その際に、こうやってスマホを片手に。先生の記録なのにどうしてスマホが必要なのかというと、中国はIT化が非常に進んでおりまして、子供のドキュメンテーションも全部スマホで済ませる。子供たちが一人一人、ここへ全部入っておりまして、先生方は保育しながら写真を撮って、そこにエピソードを記述している。それが全部たまって、先ほどの子供の昼寝時間に、それをドキュメンテーションに書いているということをやっております。私は非常にびっくりしたのですが、先進的な活動をしています。

さて、「学びに向かう力」をどう評価するかというと、今のようなドキュメンテーションの評価というのがあって、こういうものは一部の所でやられておりますが、やはり研修、トレーニングが必要で、幼稚園・保育所・認定こども園の先生方も、このように書くのは必要だと思っておられると思いますが、そういうのがやはり必要なと思います。そのためには、研修がある程度必要だと思います。小学校へつなぐというところで、アプローチカリキュラムなり、スタートカリキュラムなりの取組が始まっております。

三点目です。研修の機会の充実ということで、プランに関わっては教育委員会がメインにしてやられておりますが、なぜ教育委員会を小さく書いたかということ、教育委員会が関わっている公立幼稚園というのは、広島県内でいうと実に15%のお子さんが行っている所で、85%はそれ以外のところに行っておりまして、そのプランなり、その研修の在り方も、教育委員会主導でやりますと、ここで納まってしまうのは非常にもったいないと思います。

公立保育所、今、保育所の方で待機児童がおりまして、ここにたくさんお子さんも行っています。あるいは私立の幼稚園というのもございますし、そこにも子供たちはたくさん、あるいは認定こども園というのも出ています。こちらの方に、方向性なり指導の中身なりをうまく伝えるような方策がないと、公立の幼稚園だけ先生方が研修を終えて、すごくスキルが高まったでは、全県を挙げての幼児教育の充実、保育の充実にはならないかなと思います。

最後でございますが、マネジメント機能を有した幼児教育センターの設置を、是非お願いしたいと思います。これは先進地域、例えば福井、高知、栃木、札幌、仙台などで、既に実施されております。文部科学省は3年の計画で、各県・各市、必要な所には設置を支援するという話を聞いております。中ではいろいろなことをするわけですが、一番最後に出ていますが、園内リーダーとか市町幼児教育アドバイザー。これは、この度のプランに書かれてありますが、アドバイザーを養成したり、そのための研修を実施するというところでございます。

これは、実は広島県においては、私立幼稚園では私立幼稚園連盟だけでやったり、保育所は保育所だけでやったり、あるいは私立保育所は私立保育所でやったり、公立幼稚園は公立幼稚園だけでやったりして、その研修内容もばらばらなのが実態です。

先ほど申し上げたみたいに、幼児教育は保育者の力量にかかっています。そうすると、研修内容を均一にして、ある程度ちゃんとそれを保証してあげないと、保育の中身の価値が高くないのではないかと考えています。是非、関係の方々には、そのセンターの設置をお考えいただきたいなと思います。

一番先進的にやられている福井の幼児教育支援センターというのがございますが、中身はこういうことをやっています。いろいろな巡回相談を受けたり、他には先ほど申し上げましたドキュメンテーションを書く場合の、その書き方などの研修もやっていたりしています。あるいは、小学校1年生の教科書を幼稚園・保育所の先生も学ぶ会と、これも非常に私は有効ではないかなと考えています。できるだけ、こういう先進事例を踏まえながら、広島県でも始めていただければなと思います。

三つの視点について申し上げました。研修についてもマネジメント施設等を、是非お作りいただければなと思います。以上です。ありがとうございました。

湯崎知事： ありがとうございます。七木田先生には、後ほど、また協議の場でも御意見を賜ればと思いますので、よろしくお願ひします。

続きまして、慶應義塾大学 今井先生に御発表をお願いいたします。

今井教授： 慶應義塾大学の今井でございます。今日は非常に大事な会でお話しさせていただく機会を頂きまして、大変ありがたく光栄に存じております。

今、七木田先生の方から非常に大事なお話がありまして、七木田先生は主に、広島県の子供たちが就学をする前に、その準備としてどういうことが保育所・幼稚園でできるのか、あるいは行政としてどういうことに気を付けなくてはいけないかということで、非常に大事な提言をされたと思いますけれども、私は認知科学という人の心の仕組み、人の心と脳の仕組みを研究しております。

そのような観点から、先ほど七木田先生がお話しされていた幼稚園・保育所のときにあまり問題がないように思えた子供が、小学校に入って1年生、2年生のときに既に学業不振ということになることが、非常に印象に残っておりますけれども、その根っこというのがどういうところにあって、そういう問題を回避するために何ができるのか。特に幼児期の学びというのは、保育所・幼稚園は大事ですけれども、家庭との連携も非常に大事なのです。

やはり家庭、あるいは、コミュニティ、市民と共に子供を育てていくと。そういうことを提案させていただきたく、そこにおける、いろいろな気を付けなくてはいけないところ、あるいは考えていただきたいことを中心に、お話しさせていただければと思っています。

先ほど七木田先生のお話にもありましたけれども、就学後の学びに対して一番大事なこと、その前に身に付けなくてはいけないことで、大事なことは何だろうということからまず考えたいと思うのです。一般的には字が読めることとか、字が書けること、計算ができること、いろいろなことを知っていること、ちゃんと座っていられることとか、そういうことが言われております。そういうことで実際、先取りして、一生懸命子供に字を教えたり、書けるようにしたり、いろいろな知識、例えば英語を教えたり、そういうことをなさっている親御さんもたくさんおられます。

私の発達心理学、認知科学の観点からいうと、大事なものは、そういう知識、いわゆる一般的に知識と今まで言われてきたことではなくて、「考える力」だということを申し上げたいと思います。

「考える力」といっても非常に抽象的なのですが、私は認知科学の観点から、「考える力」というのを三つに分解して考えています。一つは、情報処理能力。次に、情報処理能力を足場にした、推論力。更に、その推論力を総合して、様々な推論力を総合した形で問題解決力。この総体が、「考える力」です。この「考える力」が、これからの学力に、どの発達レベルにおいても、最も大事なことです。この基礎を、是非、幼児期、就学前に身に付けてほしいと考えております。

まず、なぜ「考える力」が大事なのかということですが、「考える力」、先ほどその三つの要素をお話ししましたけれども、この三つは全部を一緒にして、少々専門的な言葉を使うと「実行機能」と言い換えることができます。これは、複雑な課題の遂行の際に思考や行動を制御し、可能にする認知システムと言ってもいいと思います。例えば、本

来の目的に立ち返って、自分をモニターしながら解決策を考えたり、あるいは新しい行動パターンを覚えて、それを状況に合わせて最適化していった問題解決に向かうというような、人間の目標志向的な行動を支えるものです。一般的な言葉でいうと、「考える力」になります。

この「考える力」というのは、全ての能力の背後にあります。これは、例えば読み・書き・計算などの、いわゆる学校で習う知識を習得するための知識、その背後にも、もちろん必要ですけれども、今話題になっている社会性の能力にも中心的な役割を果たします。社会性も、非常に「考える力」というのをよりどころにしておりまして、もちろん他人をいたわる気持ち、優しい気持ちというのは大事などころではありますが、それだけでは他人を思いやる行動はできません。他人を思いやる行動をするためには、他者が何を考えているかということ推論、考えることが必要なのです。

そのためには、状況の理解も必要です。あるいは、自分の感情を振り返って、ちょっと一歩引いたところで、自分の感情の状態、あるいは自分の知っていること、知識の状態、そういうものを、ちょっと一歩引いて、どうかということモニターしながら、自分を制御する。それも「考える力」に含まれている、というよりむしろ、「考える力」がないと「思いやりのある行動」はできないということです。だから決して、社会性というのは、「考える力」と切り離されたところで感情の問題としてだけであるのではなくて、もっとずっと知性、認知の問題と深く関わっているところを御理解いただき、その「考える力」総体を育てていくということが、喫緊の課題だと提案させていただきたいと思っております。

まず「考える力」の最初の一步で、一番基礎的なところでは、情報処理能力というのがあります。この情報処理能力というのは、言葉はちょっと専門的に聞こえるかもしれないですけれども、例えば言葉を理解して話すということは、非常に多くの部分、単なる言葉の意味を知っているみたいなことではなくて、情報処理能力というのが非常に大事なのです。

この写真は私の研究室からの実験の写真ですけれども、例えば、この状況で子供に「アンパンマン見て」と言います。子供は普通、「アンパンマン見て」と言われて、アンパンマンを知っていれば見る事ができるのですけれども、ここに含まれる情報処理というのは、例えばまず「アンパンマン見て」という言葉に対して、その言葉かけを「アンパンマン」、「見て」のような単語に分けて、それぞれその単語が、自分が知っているかどうかということ記憶と照合して、知っている場合には、それと照合して理解をするわけです。知らない言葉が含まれていたら、それが何を意味するかということ推論しなくては行けないわけです。その上で、考えた結果を行動に移して、その対象を見るということです。これはなんでもなしのように思えますが、非常に複雑な推論、情報処理と推論の過程というのが、ここに含まれているわけです。

ここで非常に大事なことは、その情報処理がどれだけ効率よくできるかです。どのくらい上手にできるかということに、2歳の段階でかなり個人差ができてしまうことをお伝えしたいと思います。その個人差というのは、その子の持って生まれた遺伝子とかという問題ではなく、その子の育った環境に非常に大きく影響されるということが分かっております。この場合に、語彙数と情報処理能力というのは非常に深い関係、いわゆる私たちが言う、相関する関係があるということも分かっております。

実は、アメリカのスタンフォード大学の研究で、非常に重要な研究なのですけれども、社会経済的背景によって、貧困家庭のお子さんというのは情報処理の正確さ、速さが、2歳の時点で6か月ぐらい遅れているということが分かっているのです。

このグラフは短いほど速い時間でターゲットを見ることができるといふもので、棒が短いほど効率の良い情報処理ができているということなのです。濃い方が18か月児で薄い方が24か月児なのですが、そうすると24か月の子供というのは18か月よりも棒が短くなっているのです、その分、速く反応ができるようになることが分かります。しかし、低SES（社会経済的地位）と高SESを比べると、随分そこに差があることが分かります。しかも、低SESの24か月は、高SESの18か月よりも情報処理が遅いことがグラフから見て取れます。つまり、2歳になったばかりの時点で、6か月分の差ができてしまっているということなのです。

もちろん、この情報処理の差というのは、ただの言葉の理解力にとどまりません。というのは、言葉というのをどのように子供は学習していくかということ、言葉の意味を直接教えることはできないので、ほとんどは状況から子供が推論していきます。だから、

推論力が大事なのです。そしてその推論を下支えするのが、情報処理能力なのです。要するに、推論をするということは、どれだけ自分の知っている言葉を使って状況を判断し、それで知らない言葉を推論するという事なので、知っている言葉が少なければ、情報処理が上手にできなければ、新しい言葉が入ってこない、学習することができないわけです。だから、どんどん格差は広がるばかりなのです。

子供は日々、知らない言葉をたくさん聞きます。そのときに、私たちは知らない言葉を聞くと、ふーん、何だろうと思うけれども、子供は知らない言葉を聞くということが当たり前なので、ごくごく自然に推論をするわけです。そのときに自分の知っていること、知っている語彙の知識を使い、更に推論力を使って見極めます。例えばこの絵の状況で、「フェップは青いの」、「フェップを探して」と言われた時、この中だったならば、フェップというのは青いから、例えばクレヨンと乳母車を知っていたら、それはフェップではないだろうと思うと。フェップは青いのだから、左上にある物でもなくて、右下の物だろうというような一連の推論をして、ごく自然に、フェップというのを直接教わらなくても、右下の物がフェップであろうと子供は推論し、それをフェップとして記憶して、保持することができるのです。

3歳ぐらいで、結構こういうことができるということは分かっているのですけれども、低所得家庭の子供というのは高所得家庭の子供に比べて、このような推論が苦手だということも分かっています。だから、情報処理の能力が遅れているということが、そのままダイレクトに語彙の差にもつながり、更に推論力にもつながっているのです。もちろん、この力、推論力・語彙力・情報処理能力というのは、問題解決力にもダイレクトにつながっていきます。

こういう力を育むものは何なのかといったときに、ここでとても大事なことは、子供の遺伝子ではなくて親の語りかけなのだということが、発達心理学で分かってきています。

例えば一つ、こちらで紹介したい研究では、まずお母さんと子供を研究室に呼んで、自由に遊んでもらいます。その前後に、お母さんにインタビューやアンケートをして、お母さんが養育に対してどういう考えを持っているか、あるいは、どういう態度で接しているかということです。お母さんの養育に対する考え方や、実際に子供に対してどういう語りかけをしているか、どう子供と遊んでいるかというデータを取っております。

そのときにこの研究者たちが注目したのは、子供が自立して問題解決をするための支援を、どのくらいしていたかということです。例えば子供を放りっぱなしで、自分でやりなさいと子供に全部丸投げしてしまう、あるいは任せてしまう、そういうタイプのお母さんもいますし、逆に、全部自分でやってしまうお母さんもいます。そういう中で、この研究者たちが大事だと設定した観点というのは、例えば、子供が新しい挑戦をできるように、先にセットアップしてあげるとか、子供が何をしたらいいか分からなかったら、ヒントを与えたり励ましたりする。あるいは子供と同じ目線で、子供が課題に夢中になれるように、集中できるようにしてあげる。あるいは子供に合わせて、選択するような機会を増やしてあげる。

これらの行動を、自立して問題解決するための支援というようにポイントを設定して、こういうポイントをどのくらいお母さんが実践していたか、そういうお母さんがどういう認識を持っていたかを記録しました。そして、お母さんの態度とか実践が、子供の少し後の「考える力」に、どのくらい影響を与えるのかということ調査したわけですが、非常に大きな影響を与えるということが分かりました。

それからもう一つ、先ほどの、経済格差によって貧困家庭、低所得の家庭のお子さんというのは、情報処理能力が余り効率的でなく、成長が遅く、語彙が少なく、推論力も弱いということでしたけれども、それを親への介入で変えられるのかということ調査した研究もあります。

これも、先ほどのスタンフォード大学のチームがやった試みなのですけれども、あの辺り、カリフォルニア州には、スペイン語を話すメキシコあるいは南米からの移民の方がたくさんいて、そういう方というのは家庭の収入も余り多くありません。それだけではなく、お母さんたちが英語が余り得意でないということで、子供に対して余り豊かな言葉かけができない。余裕もないし、英語の能力もない。でも英語で話しかけなくてはいけないという、ちょっと間違っただけの思い込みがあるので、そういう得意でない言語で子供に話すときは、「ノー」という禁止の言葉だけになりがちなのです。そういうことで、子供が受ける親からの語りかけ、インプットというのが非常に乏しい、貧しいものにな

ってしまっていることが、以前の研究で報告されていました。

この研究チームの人たちはそこが一番の問題ではないかということで、こういう親御さんたちに対して、介入プログラムをやってみました。もちろん、これは研究の一環なので、同じような階層の方々を半分に分けて、半分の方々は特にそういうプログラムはせず、もう半分の人たちに対して、その研究者がどういう語りかけをしたらいいのかというワークショップを行って、支援をしたわけなのです。

その結果、非常に大きな効果があったことが報告されました。まずお母さんたちの態度が変わりました。子供に対する養育態度や認識が変わったのです。それが、もうちょっとすると子供の方に現れて、同じ階層のいわゆる統制群というのですが、比較群と比べて、子供の語彙力がアップし、更に情報処理能力も比較群に比べて随分底上げができたという、非常に大事な報告が上がっております。

オバマ前大統領がおっしゃっていたように、高SESの子供たちに比べて低所得の家庭の子供というのは、3000万語も話しかけられる言葉が少ないということが報告されています。就学時までには、すでに非常に大きな差ができてしまうわけなのです。それを何とか早いうちにキャッチアップさせる。そのことが、子供たちがそこから学力を身に付けて、より良いキャリアに進め、より良い充実した一生を送れると。そういうことに対して、この幼児期でこ入れというのがすごく大事だということをオバマ前大統領もおっしゃっていて、今の政権でもそれが続くことを本当に祈っております。

それから、こちらの研究者チームあるいは他の研究者チームも、アメリカでは非常にこの大きな社会問題に対してたくさんの研究がされておりまして、まず1歳半、2歳の時点の違いというのは、放置すれば更に大きな学力の違いを生むことは間違いないということも分かっています。というのは、2歳時点での言語処理の速さというのは、同時期の語彙の成長と非常に大きな関連がありますし、2歳時点での言語課題の成績が、6年後の言語能力と非常に大きな相関があるということも分かっているからです。

つまり、2歳の時点での言葉の力、それは単に幾つ言葉を知っているかということではなく、どれだけ上手に情報処理ができて推論ができるか、ということですが、これが就学をしてから学力に直結するということなのです。

でも、ここで御紹介したいいくつかの研究から分かった大事なことというのは、それは家庭の環境が違うからしょうがないよね、ではなくて、介入することで、特に親御さんに対して、このように語りかけたらいんだよ、このように子供に接したらいいんだよというトレーニングをしてあげることによって、大きく改善することができるということなのです。

ヨーロッパもそうですけれど、アメリカは特に、経済格差という大きな社会問題が子供の言語能力や認知能力（考える力）にどのような影響を与えるのかという問題に対して、多くの研究者が取り組んでいます。また、その格差を埋めるための社会的な取組も試みておりまして、さらにその効果を科学的に検証しています。その中で一つ、私が非常に興味を持ち、こういうことを日本でもやりたいなと思っている事例がありますので、最後に御紹介させていただきたいと思います。

キャシー・ハーシュ＝パセックさんという、テンプル大学の心理学の教授がいっぱいしゃいます。この方は、アメリカ最高の知識人が集められたシンクタンクであるブルッキングス研究所のフェローでもある方で、私がずっと長い間研究をしていた仲間です。この方は言語の習得の基礎研究で素晴らしい業績を上げておられて、数々の非常に大事な賞も受賞されている方なのですが、基礎研究にとどまらず、それをどのように社会に浸透させていくか、どのようにコミュニティができるかということも、実際に試みられています。言わば、社会実験をされているのです。この方がアメリカで始めたことが今、全世界で非常に注目されています。この「BECOMING BRILLIANT」という本を最近出されて、今、これから私たちが翻訳することにはなっているのですけれども、昨年12月に日本に来てくださって、私たちと一しょにワークショップもしてくださいました。

キャシーさんがおっしゃっていることは、これからの子供に必要なのは6Cの能力だと言っているのですけれども、その6Cというのは、コラボレーション、共同ですね。それからコミュニケーション。あと、コンテンツというのは、いわゆる知識というものです。クリティカルシンキングは批判的な思考、あるいは自分を振り返る能力。それから創造的、クリエイティブイノベーション。それから、コンフィデンスというのは、自分に対する自信、そういうもの。これが今のこれからの子供に、最も大事な基礎能力だと言っていて、私が補足して御指摘させていただきたいのは、この6Cの能力というの

を支えるのは、先ほどの思考力、「考える力」というものなのです。

この中で、コミュニケーション能力、コラボレーション能力が最も大事だということはおっしゃっているのですけれども、先ほど私が申し上げたように、これは単なる気持ちの問題ではなくて、思考力の問題であるということをおっしゃっていただきたいと思います。こういう全部が一致、統合されたような、そういう力を子供はつけていかなければいけないし、これが一番有効にできるのは幼児期であるということをおっしゃっていただきたいと思います。

その中で、キャシーさんのコンセプトとして大事なことは、そういうことは幼稚園・保育所で学ぶことも大事だけれど、それだけではないということです。この能力は社会全体で育んでいかなければならないし、その中でももちろん家庭の役割が一番大事です。家庭が最も大事な学びの機会を与える場所です。でも家庭だけではなくて、もっと社会全体で、こういうことを子供が学べるような、そういう環境をつくっていきたくてということをおっしゃっています。子供が社会の中で思い切り遊びながら、それが様々な学びにつながるということが大事なのです。そういう学習を、プレイフルラーニングといいます。

この理念は、こちらの広島県のプランと全く同じです。子供がとにかく精一杯遊ぶ。でも精一杯遊ぶのは、単なる楽しみのために遊ぶだけではなくて、それによってももちろん体も健やかになる。同時に、「考える力」も身に付けることができる。「考える力」を身に付けるのは、例えば英語の単語を暗記するとか、九九を暗記するとか、そういうことではなくて、このプレイフルラーニングによって、実際に状況に応じて、今、何を判断し、何を考え、どのように行動するかという、その力が育まれていくのだということです。学びの場というのは「考える力」を育む場と考えるべきです。これはもちろん幼稚園・保育所でもですし、学校もそうです。でも、もっと家庭の役割、コミュニティの役割を見直そうよという運動です。

学びを提供する場というのは、教育機関限定ではありません。街でも、公園でも、お店でも、「考える」スイッチを入れる仕掛けは様々にできます。例えばキャシーさんの試みですけれども、貧困層の地域のスーパーに行って、サインを置き、そのサインに、ちょっとしたゲームを「DID YOU KNOW?」みたいに書いて、「知ってる？」と書いて、なぜかクイズ、そういう看板を置いておきます。ただこれだけなのです。本当にほとんど予算をかけずに、こういうことをただで、親から子供への語りかけが33%も増加したという実績を出しています。ほとんど予算をかけないで、大きな成果が上がっているのです。私たちの発達心理学研究者に対してだけではなく、アメリカ全体の教育界に非常にインパクトを与えた試みと評価されています。

それだけではなくて、キャシーさんが仕掛けているのは、アルティメット・ブロック・パーティという試みです。これは「究極のご近所パーティ」と私は訳しているのですけれども、この間も私たちのワークショップに来てくださっておっしゃっていたのは、私たち発達心理学者、認知科学者は、学びについて大事なことについて研究を積み重ね、いろいろな知見を持っているけれども、それが普通の人に伝わっていません。もちろん講演会をしたり、勉強会をしたりということは様々になされているわけですが、一番来てほしい層の人は、なかなかそういう場に現れてくれないわけです。そういう所に来てくれるのは、いわゆる意識高い系で、経済層でいうと中流以上の方々は来てくれますけれども、移民の方々、あるいは非常に、社会の底辺にいるような方々というのは、なかなか来てくれない。

その現状に対して、誰にでもアクセス可能なように、誰もが日常の生活の中で訪れる、公園で学びのイベントをしようとキャシーさんは考えました。ニューヨークのセントラルパークでやったらどうかということで、ニューヨークの公園の管理事務所みたいな所に話をし、ニューヨークの市長に話をし、子供博物館の協力を求めました。最初は誰も、そんなの無理だよと言っていたのに、キャシーさんが計画をまとめていくうちに5,000人ぐらいは来るかもねという感じになって、それでニューヨーク市も協力しようということになりました。それで実際にやってみて、ふたを開けてみたら5万人の市民がイベントに訪れ、大評判になったのです。

そこですぐに何かすごいことができるというわけでもないのです。でも学びや教育に関して、今まで自分が考えてきたことややってきことと違うやり方があるかも、こういうのはもっといいかも、という意識を一人一人が持つことがとても大事なのです。そういう意識を、意識高い系の人だけではなくて、どの市民の人でも、特に経済的に下の人たちにも持ってほしい。そのために、低所得層の人たちが集まっているし、なんだか面

白そうと思って公園に行ってみたら、もしかしたら自分もこういうことができるのかと思うようになるかもしれない。そういうきっかけづくりが目的です。

この試み（アルティメット・ブロック・パーティ）が最初にセントラルパークで行われたのは2010年で、そのときは5万人の人が参加しました。それから、ニューヨーク市で始めたことが、トロントとかボルティモアとか、もっとヨーロッパ、あるいは、いろいろな所で注目を浴びて、世界の都市にリレーされているということなのです。

私はキャシーさんと個人的に親しくて、もう20年ぐらいお付き合いをしています。こんなおしゃべりをしていて申し訳ないのですが、実はキャシーさんの息子さんは、この間ゴールデングローブ賞を取られた作曲家というか、映画音楽とかブロードウェイミュージカルの歌を書く人で、今、本当に注目されている方です（注：この方は「ラ・ラ・ランド」というミュージカル映画の主題曲を作り、それが今年のアカデミー賞の作曲賞を受賞しました）。今29歳ですけれども、その方が高校生で、すごくもやもやしていて、お母さんとけんかしているようなときからずっとお付き合いしていて、キャシーさんがどのようにして子供に向き合っていて、独り立ちさせたのかということも知っています。

そのようにして、自分の家庭でも彼女のフィロソフィーを实践され、素晴らしいお子さんたちを育てられました。自分の家庭での実践にとどまらず、街の一角を遊びと学びの発見の場にしてしまうということで、例えばバス停などに、さっきのスーパーのサインのようなものを置いたり、ちょっとした工夫で親子が遊べたり、あるいはクイズができたり、話しを、とにかくコミュニケーションをする。そういう、コミュニケーションを誘発するような仕組みをコミュニティがつくっていくようなことも提案されています。このアイデアは今、アメリカを中心にして、世界の様々な都市で、例えば公園とか、あるいは都市計画をするような所で取り上げられています。

私は広島で、是非日本の他県に先駆けて、こういうことをやっていただきたいと思っています。広島県への期待ですけれども、大事なことは、保護者や保育者に、子供が乳幼児期にしなければならないこと、学ばなくてはならないということ、やはりきちんと理解していただきたい。その上で、県民の方々が学びや教育についての認識を変えるような働きかけをしていただきたいと思っています。

申しあげましたように、子供への対話の質というのは、子供の学力に対して最も大事なことです。でもそれは、大人の子育てに対する認識や態度の関数でもあります。大人が自分で学びたい、探求したい、そういう思いを持っていないと、それは子供には伝わりません。自分が探求しないのに、子供に探求しなさい、勉強しなさいと言っても、子供は言うことを聞きません。

なので、だからこそ、これまでのような大人が子供を教えるという一方的な関係ではなくて、大人も子供も共に学べるような仕掛けづくりを広島県で、日本をリードする形でやっていただきたいと思っています。そこから、広島から日本、世界中の学びに対する意識改革とか、価値向上につなげていっていただきたいと思っています。広島県全体を学びの場にして、学校の内も外もプレイフルラーニングができる、そういう学びの場にしていただきたいなど。

私は、広島県はもうそれを一部始めていると思うのです。生涯学習課が実践されていることは、本当に素晴らしいと思っています。この四コマ漫画をいろいろなショッピングモールで配る。キャシーさんの、サインをスーパーマーケットに置くということもすごく有効で注目を浴びていますけれども、このアイデアはキャシーさんの上をいっていると、私は思います。というのは、四コマ漫画は親御さんが持って帰れますよね。持って帰って、家庭でやってみることができます。そういう意味で、本当にこれは素晴らしいアイデアだと思うのです。

私、その生涯学習課の方たちが本当に努力されて、ほとんど予算を使わずに全部自前でやられているということを知っているのですけれども、この活動をもっと推進することを湯崎知事をお願いします。これはキャシーさんのやっていることの上をいっている、世界に知ってほしい試みです。

最後、私は是非、アルティメット・ブロック・パーティを日本でやりたいと思っています。最初は広島でやりたいと思っています。「学びの変革」のプラン、この推進プランに私は心から賛同していてエールを送っております。この素晴らしい理念を持った広島県で是非これをやりたい、やっていただきたいと思っています。

長くなりましたが終わらせていただきます。ありがとうございました。

湯崎知事： どうもありがとうございます。

今、お二人から、本当に貴重な、有益な発表といいますか、御教授を頂いたと思います。本当にありがとうございます。すごく重要な情報が多くて、情報処理がしきれていない感じですけども。

それでは、ここからはお二人の先生も含めて、「乳幼児期の教育・保育の充実について」ということで議論をさせていただければと思いますが、まず、どなたからでもいいですので、御意見のある方から挙手をしていただければと思います。いかがでしょうか。

佐藤委員： 社会的な水準というか、収入の格差によって、非常に会話が少ないが故に語彙が少ないということだろうと思います。収入の少ない家庭において、それを取り戻すためにサポートされて、いろいろ、スタンフォード大学で助けられながらやっておられるんですけども、家庭でそれができるようになるためのやり方というのはどうしたらいいのかということ。時間がない、恐らく皆さん、子供と会話したくないという人はいないだろうと思いますけれども、それでも差が出てしまう中で、どのように効果的にそれを埋めたいか、お考えがあれば教えていただければと思います。

今井教授： もちろん、収入が少ない方は非常に切迫した生活を送られていて、時間もないということですけど、でも考え方とか、どのように接すればいいかということを知る、接することによって、子供がどう変わり得るのかということを知ること、非常に大事なことなのではないかなと思うのです。

まず一つ、これはアメリカだけではなくて日本でも言えることだと思いますけれども、移民の方たちは、移民した先の言語を子供に対して使わなければならないという思い込みを持っておられるケースがよくあります。例えば日本にいらっしゃる移民の方で、子供を日本で育てるために日本語を話さなくては行けないと、いつも思っている方が多いのです。自分は得意でない、余りよく話せない日本語でしか話しては行けないと思うと、やはりそれは、なかなか深い会話ができないですよ。

でも、実は大事なことは、日本語であろうと中国語であろうとポルトガル語であろうと、何語でもよいので、とにかく幼少期に言葉というものを、何かよりどころになる母語を得るということです。でも、それを理解していない方たちがたくさんいるのが現状です。そういう中で、そういう誤解を解いていくことが、とても大事なことだと思っています。

そういう誤解を解くような、それは生涯学習課がされているような、四コマ漫画での啓発、あるいは幼・小、幼稚園や保育所を通じての啓発、あるいはアルティメット・ブロック・パーティみたいなことと、いろいろなチャンネルを通じて、誤った認識を解き、こういうようにできるんだよということを、上から目線ではなくて、サジェスションとして、一般の市民や届きにくい層に対してしていくということは、すごく大事なことなのではないかなと思っています。

近藤委員： 七木田先生、今井先生、ありがとうございます。今井先生のお話をお伺いしてまして、私は正に乳幼児の子供がいるのですけれども、親の意識を変える上での情報提供だとか、遊びを通じて学ぶ機会をつくるというところで、いかに親と子がいる生活圏の中にそういった場を設けるかということが大事かというのは、日々生活していて実感するところです。

子供がいる生活というのが、もうイヤイヤが真っ盛りの子供を相手に、どうやって通勤のバスに間に合わせるか、そういった目の前のことにどうやって対処するかというのに一杯一杯で、どんな子供に育てたいかだとか、なかなかそういう先のことまで見据えて考えられないところがあるのです。

そういった状況で講演会に行くとか、自分の方からいろいろ調べて、情報にアクセスするだとかというのが難しい状況がありますので、四コマ漫画、生活の中、スーパーとかドラッグストアとか、日常の生活圏の中に、そういう情報提供の場があるということは、広く一般の方がアクセスするという意味では、すごく大事なことだだと思います。

細川委員： 小・中・高とPTAとかをやってきておまして、幼稚園のときもそうでしたけれども、本当に伝えたい人に伝わらないもどかしさですよ。伝える人はいつも学校に来るし、幼稚園に来るし、本当にそれを分かっていたきたい、伝えたい方に伝えるかどうかというのは、今回も非常に問われるところではないかなと思います。

今度の『「遊び 学び 育つひろしまっ子!」推進プラン』の8ページの所、普通は、家庭と保育施設と地域が連携して、と書いてあることが多いのですが、ここには、企業を含めた社会全体で育てていくということが書いてあって、私たち企業人・経済人

は、この企業が関わっていくというのを、どのように関わっていくべきなのか、伝わらない人に伝えたいというのを含めて、どういう方法があるのかなということを感じたのですけれども、先生、いかがなものですか。

七木田教授： 私が答えるべきかどうか分からないのですが、企業を含めたということで申し上げますと、こちらの幼児教育・保育のプラン以前に、例えば広島県では子育ての「ひろしまファミリー夢プラン」というのがありまして、企業を含めて、子育てをどうするかという大きいプランになっています。

御案内のようにワーク・ライフ・バランスということで、利潤を目的に追求して何かをするというのも企業でしょうが、企業内でも働き方によって、例えば残業をどのぐらいするかということよりも、家に帰って子供と触れ合って、子供と話をし、そういう時間を確保する、雇用者の子育て支援をいかに図るかということのも非常に重要なことだと思っています。ですからそれは企業の方も、そういう幼児期とか、先ほど今井先生のお話にあったように、家庭内での会話の充実みたいなものも、家に帰ってお子さんと話しましょうという方向性を示すことは可能ではないかなと思っています。そういう意味で、企業もとても重要なこと。

細川委員： そういう意味では、知事も商工会議所連合会へおいでいただいて、県内の商工会議所もイクボス宣言をしようということで、連合会でも決定をしているところでございますが、そういう働き方改革をするということでの企業の努力というのは、よく理解をいたします。働いている方というのは帰れば保護者ですから、その先のところ、企業が努力してもその先に果たして伝わるのかなというところが、私としても非常に今からの課題ではないかなと思います。

それから、先ほど今井先生がおっしゃったアルティメット・ブロック・パーティというのは、実は私20年ぐらい前に、この頃は青年会議所という組織にいたのですけれども、当時、ネイチャーゲームというのがはやりまして、今もはやっているか分かりませんが、自然の中に大人も子供も飛び込んでいって、茂みの中に何かいるかもしれないよという発見があったりとか、森の中で、これは私の木にしようとかという取組をしながら、これは大人と子供の一種の遊びなのですけれども、そこには非常に大人も子供もわくわくして楽しく遊べて、なおかつ会社とか幼稚園でないような、現実から離れた自然の中でという、良い取組がありました。そういうものが放課後子供教室とか、児童クラブでもできるとは思いますけれども、そういうものが今後できていけば、先ほど先生が言われました、遊びの中にいろいろな次の段階に発達していくような発見とかが出てくるのではないかなということも、感じさせていただきました。以上です。

中村委員： 七木田先生、今井先生、今日はありがとうございます。お話を拝聴して、また、これまで教育委員会の教育改革推進懇談会でも勉強させていただいた中で、幼児教育・保育といいますが、大事なのは0歳児、1歳児からだということでございます。

今日のお話でも親子の語りかけということで、特段難しいことではなくて、語りかけを増やすといったことだと思いますけれども、そういった点でも、先ほどもありましたように、経済的な格差あるいは家庭の事情等があつて、なかなかそれができない、あるいはそこに気付かない家庭がたくさんあるということで、どう気付かせるかということ。もっと言えば、園・所にも通わない子供もいるわけで、どういう機会に網羅的にそれを気付かせるかということ、この四コマ漫画も素晴らしい取組だと思いますけれども、本当に、0歳児からの、そういう親御さんへも気付かせるということの努力は、しっかりやっていたらいいかなということも気付かせていただいたと思います。

それと、もう一点。幼稚園・保育所・認定こども園の教育と、あと家庭・親子ということ、もう一つ地域というのがあり、その地域につきまして、先ほどもいろいろお話もあったわけですが、この推進プランにも地域の教育力を高めるという目標が書いてあります。地域がどう絡むかということで、ボランティアとかコーディネーターとかいうのを、例えば育てていくということも大事なことですけれども、もっと人間的なつながりを濃くしていくことの工夫ということ、どんなことができるのかなと思います。

もっと抜本的に、昔で言えば御近所さんも全てが見守って関わってきたというところ、今はもう人間関係も希薄になっていますし、もっと言えば、どんな危険があるかも分からないから、むしろ挨拶もさせないようにといったこともあると思いますけれども、ハードの部分、もしかしたら幼稚園や保育所あるいは学校等も使いながら、網羅的に吸い上げていって体験させたり、親への啓発をしたりするようなやり方が、何か工夫して

できないかなといったことを考えたところでございます。もし何か御示唆があれば、頂ければ幸いです。

七木田教授： 地域の濃いつながりということですが、私は子育て支援の研究とかもして、子育て支援中の親子の方々と話をすると、お母さんの言葉ですが、例えば「地域の濃いつながりが、うざったい」ということをおっしゃっていて、なかなか今どきのお母さんに、地域あるいは人間的なつながりを強制するというのは正直難しいです。

多分、そこの仕組みとか工夫が必要で、過去あった地域のつながりをそのまま持つてくると、なかなかうまくいかなくて空回りするというのが現状かなと思います。回答にはならないのですが、そういう実態もある中で、我々は、どうやってお母さん方の気持ちを吸い上げて、その支援をしていくかという、幼児教育、乳児教育も一緒だと思いますが、そういう実態があるということをお話しします。

今井教授： いろいろな社会の在り方が変わる中で、いろいろな課題はある、難しいことも挙げていけば切りがないと思いますけれども、まず最初にできることというのは、保護者の方に、子供とお話しをするということがどれだけ大事で、それによって後の学力、例えば5～6年後の学力に、どれだけ差ができるのかということなんです。脅すのではなくて、でも実態をお伝えするということが大事なことではないかなと思います。

今、若いお父さんお母さんを見ていてちょっと気になるのは、皆さん、スマホをずっと眺めていて、ずっとそっちらかり見ていて、お子さんを見ていないのです。だから、どこか遊びの施設とかに連れていっても、それは自分がスマホをする時間を確保するために、その遊びの施設で面倒を見てほしいみたいな、そういうお父さんお母さんが多い中で、お父さんお母さんに気付きを持っていただくような啓発活動をするのは、すごく大事なかなと。

それだけではなくて、具体的にどう接すればいいのか、例えば先ほどのキャシーさんの研究でも、子供が一番遊びから学べる状況というのは、実は子供同士で勝手に遊ぶ状況ではなくて、大人がサポートする状況なのです。子供を最初から、特に小さい子、2歳、3歳の子供が遊び場にポンと放り込まれて、砂場に放り込まれて、それで砂場で初めて会った子と仲良くできるかとか、使ったおもちゃで何か遊べるかということ、そうではないと。

私、今ここに来る前に、このすぐ前にボーンランドさんという、会社がやっている施設があって、行って見たのです。すごくいい施設だなと思ったのですが、たまたま目にしたお母さんが3歳ぐらいの子供に、自分がおもちゃを独占して他の子供に分けないとか、他の子供と仲良く遊ばないとかと言って、すごく叱っていたのです。

でも、それは3歳ぐらいの子供の認知のことを考えると無理なくて、当たり前のことなのです。3歳ぐらいの子供は、ある意味でちょっと自閉的なところがあって、そんなにすぐに3歳ぐらいで、一緒にそこにいる子供の気持ちを考えたりとか、それから先ほど申し上げましたように、人の気持ちが分かるというのは気持ちの問題だけではなくて、認知の問題が非常に大きくて、できないわけです。

できない子に対してすごく怒っていて、そこは誤解から来ているのだと思いますけれども、そういう誤解を解いてあげることがとても大事なことで、大人だと、親だと、これができていないんじゃないか、あれができていないんじゃないかと、すごく焦ってしまうところがあると思いますけれども、発達段階に沿って、こういうことはこの年ではできなくても当然みたいなことも親御さんに伝えて、更に、こう遊んだらいいのでは、みたいな、それこそワークショップみたいなもので介入してあげる。そういうことはすごく大事なのではないかなと。そういうことをすることによって、親も親であることの楽しさに目覚めるのではないかなと思います。

志々田委員： 七木田先生、今井先生、ありがとうございます。まず感じたことは、伝えたい人に伝わらないということが家庭教育支援の一番大きなもどかしさであって、それはなんとかしなくてはいけないと改めて思ったところです。

七木田先生にお伺いしたいのですが、伝えたい人に伝わらない、親への介入という言葉で今井先生は表現されていましたが、親に、こう伝えたらいいよとか、こうしてみたらどうですかということを、先生の御発表の中で出ておられた幼児教育センター、ああいう先進県の幼児教育センターのような所で、そういった保育者に対する研修というものはあったと思いますが、親御さんたちに対しての、そういった研修という情報提供であったり、それからアドバイスみたいなことも、この幼児教育センターでやっておられる事例があれば、是非教えていただきたいというのが一点。

それから今井先生にお聞きしたいのは、親へ介入する方法というのが難しいところで、七木田先生がおっしゃったように、昔のようなやり方ではなかなか伝わらない。といって、ICTであったり情報提供だけで、そこら辺に物を置いておきだけ、見てもらうだけというのでは伝わらないとすれば、キャシー先生が効果的にやっておられるような親への介入方法で、日本でもできるなという具体的なものがあれば、教えていただきたいと思います。

七木田教授： 先ほどから出ていた、伝えたい人に伝わらないということで、私も非常にもどかしい。例えば、いいプランを作っても伝わらないのではないかと考えています。その場合に考えていたのは、本県で虐待予防の案件に関わることがございまして、例えば虐待予防のための講習会とか研修会を、地域の虐待予防を期するということなのですが、虐待予防で前に立って話すと、対象で来られている方はシルバー世代とか、とても虐待しそうにない、にこやかな親子。これでは全然伝わらないですよ。やって、予防になるかという、予防にはならない。

そのときふと思ったのは、いかなる家庭でもこの頃はテレビを見ていて、テレビのたかだか15秒の虐待予防のスポットで、例えば子供が泣いていて家に入れてもらえないというのを5秒ぐらい流している。あれでもじっくり見て、これは虐待なのだと見て見ている家庭は多いのではないかなと思います。

本を読んでいなくても、子供に言葉かけをしていない家庭でも、スマホはやっているかもしれません。テレビもついていて、今どきは車の中でもテレビがついていて走っているみたいなのがあって、そういうメディアをうまく使った情報発信を、この幼児教育プランも、先ほど今井先生のおっしゃった四コマ漫画についても、どんどん流していくというのが、非常にいい方法ではないかなと思います。

親への介入は非常に難しいということで、一番難しいと思うのは、正しい子育てを語りだすと、それが正しいだけに、むしろ逆に非常に有害だということがとても難しいとされていて、それが今、子育て支援に関わる人たちの難しさかなと思います。

御質問のあった幼児教育センターなどで言えば、例えばペアレントトレーニングという、親と一緒に介したグループワーキングの進め方なども保育者の人にやっていて、そういう中に自然発生的に参加して、そこで上から物を教えるのではなくて、こういうときにはこうやった方が楽しいよとか、こういう方法もあるよみたいな、工夫の伝授みたいなのも、幼児教育なり保育の先生方に研修するというのは、福井ではセンターなどでやっているということをホームページなどでも公表しております。そういう可能性もあるのではないかなと思います。

今井教授： 非常に難しい問題だとは思いますがけれども、私は、四コマ漫画は本当に天才的なアイデアだと思っているのです。それこそスーパーには本当に誰でも行くと思うので、そういうスーパーの売り場などに置いてくれているということは本当にすごいことで、それをちょっと見るだけでも随分意識が変わるのではないかなと思っています。

それと同時に、先ほど提案させていただいたアルティメット・ブロック・パーティみたいなイベントをして、普通に公園に行ったら何か面白いことをやっていたと。そのときに、もしかしたらこういうことがあるのかもとか、そういう所で実際にどう遊んだらいいかということ、一緒に遊んでもらうということはすごく大事なのではないかなと思うのです。

だから、その研修センター、とても大事だと思いますけれども、保育士さんたちへの情報伝達とか、いろいろなトレーニングも大事だと思いますけれども、私は行政は本当に素人で、何も分からないで言っているのですが、例えばそういう保育士さんだけではなくて、普通のお父さんお母さんがふらっと来られて、そこに子供が安全に遊ぶ所があって、それは子供がただ遊んで自分はスマホじゃなくて、その親御さんも一緒に遊びませんかみたいに声掛けをするスタッフの人がいて、遊び方を提案するとか、一緒に誰かが遊んでいると、こういうようにすればいいのかと思って自分もやってみたくなるというか、実はさっきのボーネルンドですごくいいと思ったのは、そういう人がいるのですね。プレイヤーという人たちがいて、実際に遊んでいるわけです。そうすると、それを見て、こうすればいいのかと分かるわけです。そうでないと、自分が何をしたらいいのかとか、子供は子供だけで遊ぶのがいいんだよねとってしまう親御さんも多いのではないかなと思って、惜しむらくはボーネルンド、随分高いなと思っていて、あそこに行くのは、かなり経済的に余裕があり、意識高い系なのか。体も使って頭も使って、とてもいいものがあるなと思ったのですけれど。だから、ああいう遊具があって、

無料でできるような施設があって、プレイリーダーがいて、そういう所でお試しができるみたいな、何かそういうことができたらいいなと思いました。

実は福島では、放射線を外で遊べないということがあって、自治体、県でそういう施設を作っているのだそうなのです。そういうことを特に貧困層の、そういう機会を持たない子供の地域に何かあるといいなとは思いました。

中村委員： 今井先生にもう一点質問なのですが、先ほどの資料の中で、情報処理スピード、低SESと高SESの結果が出てきているのですけれども、これはSESと情報処理スピードの関係を示していると思いますけれども、話しかけの量といましようか、経済的背景は関係なく、それまでの親子の会話といましようか、親からの語りかけみたいなのところの差に基づく処理スピードの差、みたいなデータはないのでしょうか。それがあれば、更に説得力があると。

今井教授： あります。実際、非常に注目を集めているので、その周辺というか、それを補強するような研究は、世界でずいぶん報告されています。日本でも、今度いらっしゃるお茶の水女子大学名誉教授の内田伸子先生が、そういうデータも持っておられていて、親御さんが子供に対して、どちらかというと高圧的に、何々をなさいみたいな命令ばかりをするような養育態度の親御さんだと、非常に豊かな経済状況の家庭でも、子供の語彙は非常に貧困になるというデータもあり、逆に収入がそれほど高くなくても、親御さんが子供の目線で一緒にお話をするような、語りかけを大事にするような家庭だと語彙力が伸びるといふデータを、報告されています。

下崎教育長： 七木田先生、いいお話をありがとうございます。広島県の今の取組に随分評価も頂いて、更に応援をしていただいたようなところがあるかと思っておりますけれども、一つは幼児教育センターのようなものができればいいのかなど。どういうものを作るかというのは非常に考えないといけないかもしれませんが、重要なことを言っていたということで、更に情報を集めていければなと思っています。

もう一点、今井先生のお話の中で、我々が、情報が届いていない家庭なり親御さんに、いかにいい情報を届けるかというのが、すごく大きいと思います。例えば、そういうことも一つ考えないといけないし、それだけではなくて、実際に情報があって、それを行動に移す部分というのにも難しさがある。

というのは、ブックスタートなどで随分本も提供されて、それから読み聞かせ、膝上抱っこで読み聞かせということも随分言っているのですけれども、ある所で聞きますと、膝上抱っこで読み聞かせはどうしたらいいのでしょうかということまで戻ります。実際に読み聞かせというのは何をどうすることなのか、体験をしてもらおうとか、それを実際に体験してもらって、こうしたら読み聞かせになるのだと。マニュアル的なものはないわけですので、しっかり読み聞かせも対話なので。そういうことが必要ということになれば、遊びで、親子が、一緒に遊ぶというのがどういうことなのかを体験できるような場というのは、非常にあればいいなと。

そういう意味では、最後に言われましたアルティメット・ブロック・パーティのようなものが、何かできないか。今は随分、全国の都道府県の調査研究で、そういう親が行く所はショッピングセンター、公園だというデータが出ていますけれども、その辺をうまく使って、体験をそこでしてもらおう。そうすることによって、その二つ、情報の提供、正しい情報、シンプルで正しい情報。そういう情報の提供をプッシュして、実際に体験してもらえるような場を、うまくつづらえることができたならなというのを言っていたようなので、少し、その辺は研究していこうと思います。

湯崎知事： そろそろ時間になってきたところですが、私も一つ二つ、質問させていただきたいところがあるのですが、七木田先生がおっしゃっていた課題の中で、内容の整合性の吟味というのがございましたけれども、これはもう少し具体的に言うと、どういう内容についての、どのような整合性なのかということをお教えいただけますか。

七木田教授： 幼児教育・保育に関しましても、数十年前から5領域という柱があって、その中で現場の保育士・幼稚園の先生は、いろいろ創意工夫しているわけがございます。ところが、この度、10の望ましい姿ということが出てきて、なおかつ広島県では5つの「遊び 学び 育つひろしまっ子！」というのが出てくると。その矢印が、どこにどう関わって、教育現場でどういう取組をしていいかというのは、現場で、いろいろなものが混乱するに違いないと思います。

その矢印とか、ここはここにつながっているというところをお見せしたり提示したり、具体例で見せていただくと、現場は混乱しなくて、整合性もとれて、なるほど、広島県

で幼児教育や保育がこういう形で充実していくというのがよく分かって、いいのではないかなと。そういう意味での整合性ですね。

湯崎知事： 七木田先生には、今後のフレームワーク的なことをおっしゃっていただいたと思いますけれども、その中で、私もマネジメントというところについて、あるいはそのセンターの機能というところについて、若干誤解をしていたのですが、今日のお話でよく分かりまして、いろいろなことを、今の今井先生がおっしゃっていたような中身についても、どのように実行していくかということも含めて、このマネジメントや、センターですね。このマネジメントの仕組みというか、組織なりで扱っていくのが、PDCAも回す上でいいのかなと感じたことです。

これも感想ですけれども、先ほどの中国の例でもありましたけれど、子供のことのファイリングですよ。これが日本では全く活用されていないというのは結構衝撃的で、これは是非、活用するように進めていかなければいけないなということ、更に充実させるというか、A3, 1枚でなくて。

実は幼稚園の中で、うちもそうですけれども、作品はちゃんとまとめてくれて、幼稚園が終わったら親にくれるのですよね。ないしは、その学年が終わったら毎年くれるのですけれども、せっかくそういうのがあるのだったら、それをすぐに更に転用して、より充実したファイルになっていくと思うので、そのことも正にICTも活用しながら進めていくような方策を、まずこういうことも、今のセンターで企画しながら進めていけばいいのではないかなと思いました。ドキュメンテーションということですね。

それから今井先生のお話も非常に重要で、具体的に示唆するものがたくさんあったと思いますけれども、これも今のような仕組みの中で扱っていきけるかなということと、どう伝えていくかについては、今我々、ネウボラを進めようというのを、来年から着手するのですけれども、ネウボラも一つ非常に重要な場所になるかなと。

そこでいろいろなお母さんをキャッチするということと、特に手厚い支援が必要そうなお母さんもキャッチをして、従来だと、それをまた虐待防止とかにつなげようというのもあったのですが、この教育についてもガイドをしていくというか、そんなことも考えていくべきではないのかなということ、それから正にネウボラに、そういう子供がちょっと遊べるスペースなどを作って、そんな事例も見せたりすれば、そこは一つ学ぶ場にも、その場自体が学ぶ場にもなるという印象があったので、ネウボラとの接続ということをよく考えていくことが必要かなと思いました。

それと、先ほどの四コマ漫画、私も、あれはどれだけ読まれるのかなという、多少疑問なところもあったのですけれども、非常に評価を頂いて、しかもこんな先端的な取組だとは、つゆ気付かず。じゃあ、もっと増やそうじゃないかとか。あれはトレーに乗っていたりしていたと思いますけれども、だったらレシートの裏に。よくありますよね。いろいろなもの、要するに多方面というか、いろいろな場所で、あるいは今、性被害の支援センターの周知というのもどこが有効かというので、トイレが有効とか、そんなことが分かってきまして。今の話も、トイレもオーケーではないかなと。個室の座る所の前があるので、落ち着いて座って読みますから。それはまた、保育があったり虐待があったり性被害があったり、いろいろあると混乱するかもしれないけれども、適度にばらけながらやったらいいのではないかなとか、そんなようにも感じました。いろいろな多チャンネルが大事だと思うので、セミナーもあれば、そういう四コマ漫画もあれば、なんとかもありみたいなの、いろいろと企画をしていく必要があるのではないかと感じました。それは、これからそれを扱っていく事務局の力量かなという感じもいたしましたので、それは事務局と教育委員会が協力しながら進めていかなければいけないと思いました。

実は、内容的には、次の学びのセーフティネットのところと、正に接着しているのではないかな。今日は本当にいい機会になったかなと思います。本当にありがとうございます。

時間がなくて、大変申し訳ありませんけれども、次回のテーマについて御提案をさせていただければと思いますので、説明をお願いします。

(近藤委員、所用により退席)

経営企画監： それでは、資料番号3によりまして、「次回のテーマについて」御説明させていただきます。

総合教育会議は、知事と教育委員会が「重点的に講ずべき施策」等について協議・調整を行う場ということで、知事と教育委員会が教育施策の方向性を共有して、一致して執行するということが期待されていると考えているところです。

そのためにも、毎回、知事部局と教育委員会が連携して取り組むことがふさわしいことをテーマとして設定しておきまして、今回もこのような、乳幼児期の教育・保育ということで取り上げさせていただいたところでございます。

次回につきましては、「テーマ（案）」の理由の所にお示ししておりますとおり、教育に関する大綱におきまして、家庭の経済状況等に応じた適切な支援に取り組むことということが盛り込まれていること、また、来年度は健康福祉局におきまして、子供の生活に関する実態調査を予定されていること、こういったことを踏まえまして、知事部局と教育委員会が連携して取り組むべきテーマといたしまして、「テーマ（案）」にございますとおり、「家庭の経済的事情などを背景とした児童生徒の『学びのセーフティネット』の構築に向けた検討について」を取り上げていただいております。

よろしく願いいたします。

湯崎知事： 次のテーマとして、今の説明にございましたようなところを考えているわけですが、それについて御意見あれば、お願いいたしたいと思います。

中村委員： 先ほどありました教育の大綱の議論のときにも、上をもっと上げるのか、下を上げていくのかという議論もあったと思いますけれども、GL校をはじめ、上の方の成果もこれから出ていくであろう中で、こういった「学びのセーフティネット」、格差の是正ということは、大変意義深いテーマだろうと思います。

県や全国の学力テストの結果の中でも、通過率30%未満の子供の数値が出ております。これを限りなくゼロにしていくということが、個人的には重要な点ではないかと思っておりますし、そのことも、広島で学んで良かったと思える日本一の教育県の創造にもつながるとも思っています。具体的に何をするか、何ができるかというのは大変難しいとは思いますが、是非、大事なテーマだと思っております。

志々田委員： 取り扱う問題としては重要ですし、また来年度にかけた最後のときに、こういった特別な配慮を必要とする子供たちのことを取り上げるのは、とてもいいことだと思っております。

ただ、大事なことを大事だと確認するだけではないと思うので、具体的な形で、どんな事業が来年度展開する、それは、私たちは教育委員会の話は結構聞かせていただくことが多いですが、知事部局の子育てや家庭のことを、働くお母さん方や家庭のことを取り扱っている部局でも、どんな事業がされるのかということと照らし合わせながら、教育委員会は一体何ができるのかということのを考えたいなと思っておりますので、そんな資料を頂ければとも思っております。

湯崎知事： ちなみに、来年度何か展開するというよりは、来年度企画しましょうというか、何をできるか考えましょうということで、総合教育会議も含めて、要するに専門家会議みたいなことを立ち上げるようになると思いますけれども、そこで練って、早ければ再来年度に実行できるようなところに落とし込めればなということですか。

そのほかよろしいですか。

(な し)

湯崎知事： それでは、また次回、このようなことで議論させていただければと思います。

今日は本当に、ちょうど次のテーマとつながっているところで、特に今の学びのセーフティネットというのがありますけれども、最初に修正するのが、一番修正するところが少ないという、ゴルフと同じような。グリーンに向かって一度違うと全然違う所に飛んでいって、でも手前なら簡単に一度だけ変えればよいというところで、幼児期はものすごく重要だなという認識をいたしました。本当に今日はありがとうございました。

それと、備忘のために申し上げますけれども、今の家庭教育というところでの話しかけとか、そういうことがあって、実は保育所ですね。特に、0歳児から2歳児の保育所での保育士さんの対応というのは、そういう意味で非常に大きな影響があるということかなと思いますので、それは逆に言うと大きなチャンスというか、例えば家庭でとてもお母さんとか忙しくて、それこそ語りかけが実際にできていないお母さんなりお父さんだとしても、保育士さんがそれをカバーしていたら、そこをかなりメークアップできる部分もあるのかなと思います。ただ思ったのですけれども、そういうことも考えていく必要があるのかなということ。忘れてもいけないので、備忘でコメントしておきます。

ということで、本当に今日は皆様ありがとうございました。

それでは最後，事務局の方から。

経営企画監： 皆さん，どうもありがとうございました。

本日の会議の予定は以上となります。最後に，次回の総合教育会議についての御連絡でございます。次回の会議につきましては，先ほど，御協議いただきましたテーマについて，できるだけ早期に開催できればと考えております。調整の上，開催できる運びとなりましたら，改めて御連絡させていただきたいと考えておりますので，よろしく願いします。

それでは，以上をもちまして，「平成28年度第3回広島県総合教育会議」を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

(17:59)